主日礼拝
２０２３年1月１５日（日）
題　「 両親はそれに気づかなかった」
テキスト：ルカによる福音書２章３９～５２節

皆さん、おはようございます。
　ご存知のように今週火曜日 17 日には、あの阪神・淡路大震災から２８周年を迎えます。今年は久しぶりに集まって三ノ宮の東遊園地で追悼集会が守られるようです。兵庫教区でも記念の日追悼礼拝が神戸聖愛教会で捧げられます。わたしもライブ配信で参加しようと思っています。淡路島も大きな揺れがあったことと思います。
　この時、逝去された方々やご家族の上に、困難の中を生きて来られた方々、今なお悲しみ苦しみを背負って生きておられる方々の上に、神さまの慰めと平安を心からお祈りいたします。

ユダヤのベツレヘムで生まれたイエスは、その後、両親の故郷であるガリラヤのナザレに帰って行きそこで生活しました。

「◆ナザレに帰る」「 39:親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。」とあります。
このナザレの村でイエスは育たれたのです。「 40:幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」と記されています。ナザレで両親の愛情を受けて育ったのだと思います。
　さて、イエスが 12 歳になった時のことが記されています。
ちなみに少年時代のイエスのことを伝えている聖書個所は、このルカによる福音書だけでとても貴重です。
「 41:さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。」
　ユダヤの掟・決まりでは、ユダヤの成人は、特に男性は年に 3 回、エルサレムの神殿に行くことが、当時のユダヤの教え・律法で決められていたようです。イスラエルの古事に関する祭りの時です。過越しの祭り、7 週の祭り、幕屋の祭りです。「越しの祭り」は、イスラエルがエジプトで奴隷状態から解放されたことを記念する日、「7 週の祭り」小麦の収穫を感謝して。「幕屋の祭り」は、「仮庵の祭り」と言われ、砂漠の 40 年に旅を守られてことを記念する祭りです。キリスト教では聖霊降臨日・ペンテコステとなりました。

その決まりに従って、イエスも両親と共にエルサレムに行ったのです。
「42:イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上
った。」当時のユダヤ社会では、13 歳になれば、今日でいう成人と見なされていたようです。イエスも目前だったのです。そのこともあり、両親と共にエルサレムに行ったと思われます。ちなみに、ナザレの村の多くの人々も一緒になってエルサレムの神殿に行ったと思われます。

ここで事件が起こりました。イエスが見あたらなくなったという事件です。
43:祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレム
に残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。
祭りの期間が終わり、帰路についた時、少年イエスはまだエルサレムに残ったいたようです。「両親はそれに気づかなかった。」父ヨセフ、母マリアは、成人近いイエスを、自由に振る舞わらせ、イエスも村の若者たちと群れの中にいるだろうと思っていたのかもしれません。
ところが、
44:イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってし
まい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、
45:見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。
両親は、イエスを知り合いに聞きながら探し回ります。
そして再びエルサレムの町に引き返したのです。
すると、
46:三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞
いたり質問したりしておられるのを見つけた。
二人の心配はかなりのものであったと思われますが、やっと神殿の敷地の中で見つけ出すことができました。両親はやれやれと安堵したことと思われます。子がいなくなることは、子を持つ親は何度か経験のあることだと思われます。
その時、イエスは神殿は境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておらたのです。「47:聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。」大人たち、律法の専門家の学者たちの、イエスの知恵と知識と振る舞いに驚きを禁じざるをえなかったのでしょう。
両親は、イエスが見つかったことに、ほっと、安堵すると共に、抑えることの出来ない感情が湧いて来たようです。これはわたしには、自然なことであると思われますし両親の気持ちは分かります。心は混乱したことだと思います。

48:両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてく

れたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していた
のです。」マリアとヨセフの率直な気持ちだと思います。
少年イエスの行いで、旅の人々にも迷惑をかけてしまったことでしょう。
ここでは父ヨセフは何も言わず、母マリアがイエスに言います。
これも気になる点ではあります。

さて、少年イエスの母マリアに対する対応はどうでしょうか？
49:すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。
わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らな
かったのですか。」何とも冷たい感じもします。
このイエスの答えは、人間的に言えば、常識的に言えば、正直理解しにくいことのように思えます。「50:しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」わたしも、そうです。イエスは神殿に残ったのです。このことがこの福音書ルカの言いたかったことかもしれません。イエスは神と共にいる。神は独り子イエスをこの世に送られた。神を宮である神殿にイエスがいることは内容的に、本質的に何の問題もないのだと。神や独り子イエスの存在を、人間の考えで特定の場所に固定することはできないのです。
後に、復活されたイエスは弟子たちに、「わたしは世の思終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と宣言されました。
　ここから「共にいる」ということについて考えさせられます。これは時代を超えて、今ここにいる私たちにもかかわることとではないのでしょうか？「イエスと共にいる。神と共にいる。」とは、どういうことなのか。「イエスが共にいる」「神が共にいる」ということです。
肉眼の目で見える時、見えるといいます。しかし、神は肉眼の目では見えないのです。神は、イエス・キリストは場所を超えて生きて働いておられるのです。
わたしたちも、本当に大切なことは心の目で見なければ分からないとも言われます。
これは真理だと思います。
　話は変わりますが、最近 90 歳を超えて召された牧師であり神学者であった関田寛夫（ひろお）先生の「目はかかすまず　気力は失せず」というタイトルの本から学ばされたことです。わたしは先生とは一度もお会いしたことはないのですが、本での出会いはあり、学ばせてもらって来ました。
関田先生は、青山学院大学大学院を卒業され、アメリカのマコーミック神学校、アンドーヴァー・ニュートン神学校を卒業後、母校青山学院で教授をされながら、神奈川県の教会で牧会、特に在日朝鮮・韓国人の方々との出会いによって

その差別問題に関わりながら地域の教会に奉仕されてこられました。その学識と真摯なお姿で日本キリスト教団の牧師たちに大きな影響を与えて来られた方です。その本の中から、一つのエピソードを紹介したいと思います。
関田先生はその本に中の「言葉は肉体となった。」というヨハネによる福音書1章14章～18節に記されている事柄について書いておられることをお伝えしたいと思います。先生は本で語っておられます。「私が神学校に入って間もなくのことでしたが、ブルンナー博士が来日（ちなみに1953年（昭和28年）に来日）され、横浜ＹＭＣＡで講演会が開かれました。つめかけた牧師、神学者たちに向けて、博士は、やおら「神様には顔があるでようか、皆さん、いかがお考えですか？」と質問されました。しばらく沈黙が続きました。その席にいた人々は何か一見子どもじみたとも見えるこの質問に答えあぐねていたのかもしれません。そして、博士自身が「わたしはあると思う。イエス・キリストのお顔がそれです。」と答えられました。その瞬間、わたし自身の中に何か、ボカッと戸が開かれるような気がしたのと、全体会場から共感（？）のざわめきが起こったことを記憶しています。）と書いておられわたしも戸が開かれる思いにされました。
イエスを想うことは神を想うこと。イエス・キリストと神さまは、区別できても分離できない、十字架において一つ、一体であるということ。

この後、イエスの家族はナザレに戻ります。
51:それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。
52:イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。
イエスは、この後両親に仕えて過ごしたのです。
「母はこれらのことをすべて心に納めていた。」母マリアはエルサレムで起こったことを、すべて心に納めていた、のです。神の前で思い巡らしていたのだと思います。わたしたちも、一人一人、自分のこと家族のこと、これまでの事、これからの事、神さまの前で思い巡らします。それで良いのだと思います。
神さまは、今もそしてこれからも主イエスを思い巡らす者たちと共にいて、万事を益に導いてくださる方なのです。

皆様の上に、主の平安を祈ります。　共に黙想しましょう。